

業思想の研究

三桐 慈海

業とは行為であるといわれるが、そのような広義のものも、宗教的な実践と結びつくことによつて、種々の概念を附帯させていったようである。仏教にあつても、その教理の思想的展開の底流をなすものとして位置づけられ、宗教的覚醒をうながすはたらきとなつてきた。そしてその業とは自業自得といわれるように、宗教的自覚のうえにのみ顕現してくるものであらう。このような根本的な課題が、「仏教学セミナー」の発行十周年記念特集のテーマとして選ばれ、各分野の担当者によつて研究された成果が、論文集として刊行された。業思想と題されるのは、業そのものの思想的展開ということではなくて、業にかかわる諸思想ということなのであらう。内容の概略は次のようである。

原始仏教の分野——「業に関する若干の考察」水野弘元。ここでは仏教における業の意味とその展開が、要を得て解説されている。身口意の三業と無表業、無表業の習慣余力と種子説、そして煩惱との関係、修道による無漏業などが、部派の学説から瑜伽行派への展開をふまえて論じられる。「律蔵とカルマン」平川 彰。業の別の意味である「羯磨」、すなわち僧伽の行為となる法式について論じられたものである。羯磨の意味と、パーリ律にみられるその種類が説明され、中でも波羅提木叉にみられる羯磨が列挙

される。「仏教における業論展開の側面」舟橋一哉。スッタ・ニパータや相应部の経文にみられる業説の原意を再考察する。そしてそれより十二縁起説との関聯や、無漏業の意義を明かにし、仏の業とする世界が開かれることを論ずる。「業論の本質」佐々木現順。業についての感情や思想をすべて捨象し、その本義を流動してやまないエネルギーの倫理的な世界への顕現として捉える。そして同じ視点での無我説と対置させて、両者の合一は体験の世界で実現され得たとする。「功德を廻施するという考え方」桜部 建。業の論理は業果の必然性と自業自得性によつて成立している。それが善業の功德を廻施するという考え方に転化し得た経過を、パーリ経蔵を資料に、*pariṇāmana* や *adisaṭṭi* の語義を検討することによつて捉える。「原始仏教における帰依と業」吉元信行。仏教における善業は仏法僧の三宝帰依に始まる。その帰依は信にもとづいたものであり、禪定という行為によつて解脱への道を開く。ここではセイロンのアーナンダの著作とされるウパーサカ・ジャナランカールによつて、在家道の意義を三帰依の上に眺める。「南方仏教の業思想」野々目了。心身のはたらきによる行為が業として輪廻する。その機構を色の等起として分析する色聚説が、南方仏教においておこなわれ、詳細な分類をもたらし、アッタサリニーなどによつてそれを示す。

インド大乘仏教の分野——「成業論の原典に対する一疑問」山口 益。世親の成業論を、大乘の唯識説の影響を受けながらも、経量部の立場で論じた、過渡期における論述であると位置づける。その根拠を七項目に挙げられるなかで、他部派の説や俱舍論

などとの対照のうちに、その時期の世親の業思想が示される。

「中観学説における業の理解」安井広済。中論第十七章によって龍樹の業について論じられる。それは業そのものが無自性であり、そのような分別思惟を越えた空の世界において、不斷にして不常の生滅相統が認められ、それが如実の実相として主体的に把握されているとする。「仏性の業」小川一乗。苦を厭い、寂靜を得んとすの切望と願いと業を有する、という究竟一乘宝性論の文を研究・和訳する。その訳文中には、業を有すること、仏種姓が悉有することの意味を同義とみて、闡提を含む一切の衆生が成仏することの妥当性が論じられている。「中辺分別論における煩惱と業」舟橋尚哉。相品の内容紹介がなされ和訳が附記される。文中の煩惱・業・生の三雜染と業。煩惱・異熟の三障との關聯に言及する。また真実品が紹介され、五無間罪についての經文の説相にも言及する。「菩薩行としての業」片野道雄。撰大乘論第二章所知相の一部を無性の註釈とともに解説している。そこには菩薩の利他行が、一切の有情を利益し、安樂ならしめようという増上意樂など、具体的に三十二法が挙げられており、更にその増上意樂に十六業が列挙される。

中国仏教の分野——「成仏の道と業」横超慧日。漢訳の般若經と涅槃經によって、成仏への道が解明される。般若經では、般若波羅蜜によって、煩惱や業を断しないままにそこに自相空をみて、しかも空に執われないことなく自然に菩提を得て、衆生教化が行われるとする。涅槃經では、悉有仏性説が闡提成仏説へ展開する必然性が論じられ、そこに業の定と不定において成仏の可能性

が明かにされる。「華嚴における業性の論理」鍵主良敬。經文に識性ととの関りにおいて説かれる業性は、業報輪廻の中で苦惱する現実を言い表わして、しかもそれを業性とする真実の世界より言い得るものと明かにする。それを華嚴教学において、事・理や無性の道理によって述べる。「天台止観と業相」福島光哉。智顛は、善惡の諸業は衆生の日常心には現われず、止観を実修する心に現われるとしているとして、止観においての業相が論じられている。特に摩訶止観の業相境を、思議境と不思議境において論ずる。「業報説の受容と神滅不滅」木村宜彰。中国に仏教が受容される過程の中で、三世業報説は了解され難いものであった。その論争が神の滅不滅の問題として提起されたという。神滅説に立つ中国側の考え方やその社会的背景と、神不滅を主張せざるを得なかった仏教側の事情が論じられる。

日本仏教の分野——「往生要集における業思想」坂東性純。身口二業よりも意業を重視するという観点から、宿業変革をめざす宗教的行為を示す書であると論じる。そして特色ある地獄・極楽の描写は、惡業の余習を尽して念仏の行善に向わすことを目的とすると位置づける。「日本靈異記における因果応報思想」白土わか。撰述の意図を、諸惡莫作・衆善奉行をすすめることにであると定めて、その特色を現生における現報が中心になっていること、感応靈驗が語られていることなど指摘する。そしてその直接の背景として中国の冥報記、般若驗記などを検討する。「親鸞聖人の業思想」稲葉秀賢。一見、宿命論のようにみえる歎異抄の宿業の思想も、決して運命的なものでなく、過去・現在の業繋の有漏業

と、現在・未来の他力の無漏業という二面性からくるものであると論じ、報土の業因や正定の業因を他力の無漏業として位置づける親鸞の業論の特色を述べる。「親鸞における宿業の問題」幡谷明。歎異抄の業報にさしまかせて」ということが、消極的な諦めを言うのでなく、積極的に現生不退の信に生きることでありと論じる。そして教行信証の「信心の業識・真実信の業識」においてその意識を明かにしていく。

インド学の領域——「インド思想と業」雲井昭善。広くインド思想にあるいは仏教との対比において、業の意味を行為・結果・余力であるとし、また輪廻とのかかわりや、仏教は業論者であるという立場などに論及して、今日的課題として把える。「マハーヴィーラの業説」長崎法潤。ジャйна教の初期の業説は、後の伝統的な解釈に混在しているが、阿含ニカーヤ等にみられるマハーヴィーラの説とジャйна經典の古層部分との対比において、少しく明かにされ得るといふ。そのような比較検討の中で、仏教への影響なども論じる。

以上の諸論文からも知られるように、業の課題がいかに多岐にわたるものであるかを思うのである。それだけに各論文のそれぞれが業の概念を共通の課題として、各自に整理してはいなかったというきらいがある。業の課題は歴史的にも社会的にも、未だ多くの問題を残している。これらを余すところなく論ずることは困

難であろう。そのために業思想と限定したのであるが、その限定内においてすら、論議が深められ得なかったのは残念である。既に言及もされているように、仏教では有漏業と無漏業が説かれているのであるから、業の課題を扱う場合には一応次の四種を考えることができよう。それは業の概念が仏教の思想として定着していく過程、有漏業そのものの意味、有漏業が無漏業へ転換する意義、そして無漏業自体の意義である。問題提起の場をそのように立て得るとして、まず一課題をその中のどの場において論じ、それを深めていくかを決定しなければならないはずである。所収の諸論文がそれぞれにその論点を定めてはいる。しかしそれが共通のものとなっていないために、その論点を別々に見出していかなければならない繁があり、他の論文との連繋をもたないことにもなる。ひいてはまたそれが論文自体の論点のあいまいさや論及の甘さをもたらすことにもなるであろう。せっかく一学会がまとめて記念論文集を刊行した、その好機を逃したうらみのあるのを、企画に加っていた一人としておしむものである。しかしともあれ、全体を読んで業思想の全般がほぼ了解されるということは困難であるにしても、それぞれの論文に論じられる課題には示唆されるところ大きいものがある。

(昭和五十年三月、文栄堂A5版、四三〇頁、四〇〇〇円)

(本学助教授 仏教学)